



2018 私の劇評

「ワクワク感が一番の作品」

芝居のことについて、あれこれと書いてみたい。ここ2、3年の間に自分の芝居の観方が随分と変わってきたと思う。従来は、例会の芝居内容だけを観てきた。最近はその日の舞台内容だけではなく、脚本・演出・出演者のより細かなところまで注目するようになってきた。例えば脚本では、長田育恵、古川健、マキノノゾミなど。演出では、日澤雄介、宮田慶子、西川信廣など。役者では、加藤健一、今井朋彦、安藤瞳など。以前はあまり読まなかった台本もよく読むようになった。そうすることで、以前の自分と比べると芝居をより深く観ることができるようになったのではないかと思う。芝居を観ることの意味についても考えるようになった。最近思うことは、芝居を観て、いろいろな人のいろいろな人生を圧倒的な臨場感の中で追体験することで、実は自分自身の人生と向き合っている

のではないかと、よく感じるようになってきた。だから、従来よりも芝居と自分との距離がより近くなってきたのではないかと思う。そこで、2018年の例会作品についてふれると、私が最も印象に残った作品は、十一月例会「蜜柑とユウウツ」だ。市民劇場賞は、八月例会「その頬、熱線に焼かれ」ではないかという声がたくさん聞こえてくる。確かに優れた作品だし、劇団の枠をこえた意欲的な取り組みとして評価できる。また九月例会「再びこの地を踏まず」の今井朋彦の迫真の演技も凄かった。しかし、「蜜柑とユウウツ」には、長田育恵の脚本の面白さ、芝居の展開の妙と物語に深みがあった。さらに、る・ぼるの三人の女優と木野花の奇をてらわない自然体の演技が魅力的だった。芝居を観ながら、次はどんな展開になるのだろうかという「ワクワク感」が半端ではなくあった。私の中では、ここ数年の例会の中で、この「ワクワク感」が一番の作品

であった。(六〇代 男性)

「On7 (おんなな) に魅せられて」

On7「その頬、熱線に焼かれ」。忘れられない、とても大切なお芝居に出会うことが出来ました。評価の高いお芝居は他にあったと思います。「声が聞こえなかった」等きびしい声もありました。課題もあつたと思います。でも、On7「その頬、熱線に焼かれ」はこれから見守ってあげたい、可能性を感じさせる、そして成長した舞台をもう一度見てみたいという想いにさせてくれました。それは、On7が結成されるまでの過程を資料で読み、事前に知ることができたからでもあります。所属劇団の枠を超えて三十代の女優七人が、演劇と自らの新たな可能性を求めてOn7を結成した。「より多くの舞台に立ちたい、もっと面白い舞台を創りたい」。その演劇に対する情熱、勇気、そして決断

に心が揺さぶられたのです。自ら企画・制作・出演するというプロデュース公演に挑む姿勢に逞しさを感ずると同時に、いつまでも応援していきたい想いにさせられたのです。このお芝居は、彼女たちが依頼した劇作家に「On7に書くには原爆乙女を」と提案され、大きな題材に取り組めるかどうかなどみんなで話し合い、「On7だからこそ取り組むこと」を決意したなかで生み出されたものであること。On7が存在していなければ、少なくとも今年、私たちが例会会で観ることが出来なかつたお芝居なのです。あたり前のように観ているお芝居が、どれだけ多くの人たちに支えられているのか。また、市民劇場の果たしている役割の大きさも忘れてはいけなと思います。On7は「私たちに出来ることは小さいけれど、みなさんから受け取ったバトンをしつかりと『演劇』で繋いでいきたい」といつています。バトンを受け取れましたか？私はそのバトンを

しつかり受け取ることが出来ました。過去に目を閉ざし、同じ過ちを繰り返そうとしている今の政治。どうしても終わらせなければなりません。失ってからでは遅いのです。一人ひとりの声は微力でも、決して無力ではありません。『沈黙は統治への賛意』です。

(七〇代 男性)

「演劇を観るといことは、心豊かに人生を生きること」

平成最後の一年を振り返ると、豪雨、台風、大地震、ブラックアウト等；、実に災害の多い一年で、精神面や体調面に不安を抱える私にとって、必ずしも良い年ではなかつたのですが、それでも人との新たな出逢い、再会；、読書、映画、音楽、美術、そして〈市民劇場〉での6本の舞台は、私の心に一筋の光と、感動を与えてくれました。2月の『ら・ら・ら』では熟年夫婦やおひとりさま（私自身がそうです。）の老後を、いかに心豊か

「私のベスト3」

今年の6本のお芝居を見終わりの私のベスト3は、一位 再びこの地を踏まず 2位 茂山千五郎家「狂言」 3位 蜜柑とユウウツです。年明け例会「ら・ら・ら」では、男性の身勝手さを見せられイライラ私なら大ゲンカの末家を出るか・旦那を追い出すと思いついて見えていました。茂山千五郎家の狂言は今回で3回目ですが、3度目の正直ではないですが今回が最高でした、内容もよくわかり狂言の面白さが少しわかつたきがしました。欲を言う、もう一本見せてほしかったです。6月の「しあわせの雨傘」は女性の向上に向かう姿勢に拍手です。テレビでよく見る豪華キャストでしたが、何か賀来千香子さんがきれいな美しいといった印象で終わつたきがします。8月は、この時にしかできないと思われる「その類、熱線に焼かれ」では、昭和20年に原爆が落とされ10年後に若い女性のケロイ

(六〇代 男性)

に生きられるか？4月の『お豆腐狂言』では、シンプルな日本の古典の笑いを。6月の『しあわせの雨傘』では、女性の自立をテーマに持ち場を与えられると人は輝くことの人生の意義を。8月の『その類、熱線に焼かれ』では、74年目を迎えた広島原爆投下の日に、原爆乙女たちの悲劇とその再生を。9月の『再びこの地を踏まず』では、野口英世を単なる偉人ではなく、欠点も含めた人間が、徐々に成長し、受けた恩を返して往く様を。11月の『蜜柑とユウウツ』では、詩人茨木のり子とその分身、近しい人たちをユークな視点と重層的に柔らかなチャーミングに過不足なく描き、私の今年のベストワンであり、感動しました。2018年は収穫の大きな〈旭川市民劇場〉の一年でした。来年(2019年)も楽しみに、心豊かに日々を送っていきたい、と願っております。

ドを治すため選ばれた女性達の、色々な葛藤の末アメリカで手術をと実話をもとに、若手女優さん7人によるセリフ劇でしたが、少し声が聞こえない部分があり残念な気がしました。9月は、あのノーベル賞候補になった野口英世のピククリ人生、学生時代のイメーヂを覆され、ちよつとシヨックでした。いまだ信じられずにいます。私のような普通の人間では考えられない人なのです。でも周りの人がほつとけなくて協力するのも野口英世の人間性でしょうか。今井さんの野口博士の演技バツチリ決まりすぎでした。志を得ざれば、再びこの地を踏まず、私には無理ですね。最後は茨木のり子さん内容はわかるのですが、題名のユウツな気分です消化不良な気分で見終わりましたが感想会に出てすつきり、のり子さんのきがかりは、亡き夫の骨ではと私なりに納得しました。詩の朗読が時折はいりまじりましたがびつたりと、すぐくすきでした。詩は好みでない私が今回

の、茨木さんの詩に出会って少し詩も読んで見ようかと思つています。73歳の詩「倚りかからず」に感動しました。倚りかかるとすればそれは椅子の背もたれだけこのことを実践できるようながんばろう。
(六〇代 女性)

「お芝居は人生模様」

今年のお芝居を観ての感想は、特に二月例会の「ら・ら・ら」でコーラスというサークルでのそれぞれの人間模様がまるで自分達の身近な所で起きているかのような臨場感があり、お芝居でありながら、日常生活の「あるある」が映し出され楽しくもあり考えさせられた作品でした。ここでのご主人と、昨年の一〇一七年「七人の墓友」のご主人とかぶってしまい、終活という言葉が頭をよぎりました。特に今年作品は、色んな人生の模擬体験が出来た作品が多くあつたと思います。

(六〇代 女性)

「六等身の六〇代」

今年度の観劇で、印象に残ってしまった「しあわせの雨傘」なのですが、何かしら「しあわせ」のテーマを期待し、賀来千香子さんへのミーハー心理をも込めての参加だったので、彼女のスタイルの良さやハスキーボイスに、ウツトリスタートだったのに徐々に「はあ?」「どどどど?」「えー!なんかなー」の疑問符ばかりが溜まってしまい、共感する暇がない私でした。でも会費分は楽しまなくっちゃの貪欲精神で、観る対象を女の敵的、旦那に意識したことで、元を取った感が。テレビでは、賀来千香子さん、いい味出していたのになー。
(六〇代 女性)

「いつまでも輝く」

私でありたい乙女心

「演劇って面白い!!」熱いあつ拍手を送った九月例会ー今も

なお語り継がれる野口英世の生涯の作品のタイトルが「再びこの地を踏まず」。マキノノゾミの野口英世像はどのようなものなのか? 小学校時代読んだ伝記からは程遠い英世さんが描かれ、そこに人間英世が溢れ今井朋彦が軽妙なる演技で舞台が膨らんで行く。ふと高校時代(今から五七年前ものこと)初めて生の演劇を観た時の衝撃が頭をよぎった。(劇団さつばろ「トタン」の穴は星のよう)あの時から私は演劇に魅せられていたのかもしれないと、半世紀も前の私にひき戻された文学座公演であつた。今井朋彦の演技が心にとんと落ちたせいか、四月、六月、八月の例会が影薄いものとなってしまった。そして、マキノノゾミ演出の十一月例会を期待した。「片づきたい女たち」の印象的な舞台から二度目の旭川公演が解散、最終公演は一抹の寂しさを持つての観劇でもあつた。複雑なるストーリー展開、一冊の詩集をめくって、息の合った「グループる・ぼる」

に惜しめない拍手と、感謝の気持ちを伝えずにはいられなかつた。その晩、私の脳みそはかき乱され、中々眠れず、起きあがって、茨木のり子「自分の感受性くらい」「私が一番きれいだったとき」を大きな声を出して読んだ。年を重ね、足、頭の弱さに不安を抱えながらも、年に六作品の舞台に出会える楽しみはいつまでも持ち続けた。私にとって旭川市民劇場は「サブリメント」であるのだから…。

(七〇代 女性)

「悲しい犠牲を

決して忘れない！」

市民劇場に入会してから八年目で、今年も大変楽しい時間を過ごせました。私も戦争を知らずに育って来た世代ですので、八月の例会「その類、熱線に焼かれ」は原爆乙女のお話し(実話)で切なく理不尽ですが現実旅行で広島の大原ドームや長崎の平和記念館知覧の特攻隊の施設等を見学して来

た時に感じた今の平和な生活には、沢山の先人の人々の辛く悲しい犠牲の上に立っている事をしっかりと心にとめて、なんとなくきな臭い今の風潮にしっかりと目を見開いて、二度と同じ過ちを犯さない様にと一人でも多くの人の心に届けてほしいテーマだったと思っております。平成が最後の年だったからこそ一層平和を願う考える心に残るお芝居でした。

(七〇代 女性)

「ワウシイ女の声」

ここ数年「夫婦の会話がない」「夫の食事を作るのが負担になった」と同世代の妻達は言う。「ららら」では、夫の言葉に傷ついて妻は入院する。戦後、学校できちんと憲法を教えていたら、暴力や暴言等は使わず、今頃はお互いを尊重しあう関係が生まれているはずでした。能や狂言は伝統芸能として学びたかった。よく研究され

てる高校の先生の学習会が例会前に企画された。能はミュージカルでセリフもわかって楽しめました。ワウシイ女に同感してました。あのまゝでは永遠に溝が埋まらない。8月6日(原爆投下投下の日)に上演された「原爆乙女達」センセーショナルな話題の裏でケロイドは消えても、身内や友人の無念さをずーと背負って生きて行かなければならない。原爆がなぜ落とされたのか?核兵器や戦闘機を買う政治家に「平和の道」は望めない様です。On?の若い女優達は劇団の枠を超えて結束したユニット。今、あらゆる挑戦をしてるのでこれから楽しみです。「野口英世」読む機会もなかった偉人伝ですが、大火傷を負って医者と関わった事はその後の生き様に反映した様に思う。挑戦し続ける姿に支援者も多かったです。日本の常識枠では潰れてたかもしれない。メリー・ダージスとの結婚生活から創られた脚本がよく、今井

さんの「野口」が生きいきしてました。茨木のり子の遺された詩集「歳月」はまだ読んでない。「蜜柑とユウウツ」のため当初から、会員になってくれた友人。私達の生きづらかった時、いつも勇気をもたらした茨木のり子の詩、友人はその全てを読んでいた。舞台は亡くなつて心残りの幽霊が登場する。「自立せよ女性達」でなく誰もが体験した日常の思い出(自分の人生)を重ね合わせ、静かに感無量でした。二〇一八年も演目は充実していたと思うのですが、テレビ等で話題の女優さんの立ち居振る舞いも人気があり、心おきなく楽しめる作品も望む年金生活者達も増えています。

(七〇代 女性)

「いつぱの力」

大原横子

「蜜柑とユウウツ」の真髄を受けとめられたか自信はないが、昔から茨木のり子さんの詩が好き

だった。私の側にある五冊。一冊は『自分の感受性くらい』これは夫の克之が、買い求めた箱入りの詩集。—自分の感受性くらい、自分で守れ、ほかのもの—には何度も励まされた。高度経済成長期が過ぎてもお、厳しい競争社会。在職中に教師も生徒も気持ちを良好に保つのが至難の業だった。二冊目の『寸志』には「落ちこぼれ—和菓子につけたいようなやさしさ—なんと素敵な発想。三冊目は『倚りかからず』この詩集には「マザー・テレサの瞳」があった。—瀕死の病人をひたすら撫でさすだけの、慰藉の意味を、—言葉が多過ぎます、とあって一九九七年、その人は去った—四冊目の『歳月』を私は朝日新聞2010年8月の記事で知る。三浦安信、のり子夫妻が草上に居る美しい写真に「生と死のあわいへ視線貫く」の見出しで、初の回顧展を紹介していた。この詩集を持って久しいが、その中の「道づれ」を私は夫の克之と、同じ2018年に亡くなった菅野

浩氏にたむけたい。氏は旭山動物園の獣医師で元園長。劇団やまなみ主宰者であり高校演劇の審査員を幾度もつとめた方だった。克之が旭川に下り立ってすぐからの演劇の先輩であり、旭川市民劇場創立にも共に関わっていた。叔子さんという伴侶が亡くなって20年になる。夫妻は、やまなみ創立20周年の記念公演に大原克之脚本『石けん物語』を上演してくださった。地元旭川で天ぷら廃油から石けん造りに成功し商業ベースにまで乗せた人物、篠原元次氏の生涯を描いた本だった。北海道で第一番目にリサイクル石けん製造を軌道に乗せ、今では息子さんが旭川のゴミ収集車の燃料BDFを製造。(車にはあべ弘士氏の旭山動物園の動物たちの絵が描かれている)旭川で演劇活動を育んだ同志のような菅野氏と夫。「道づれ」の最後の一行—とつともなく蒼いイノセントの世界へ—向かったのであればいいが…。五冊目は『おんなのこ とば』縦15cm、横10cm程の小さな

詩集。これを退職後の散歩中にブックオフで発見。手にとれば表の見返しには、鉛筆書きで茨木の子とサイン入り。既刊六冊から35編を選んだものという。この中の、「さくら」を病床の夫に何回も、雪融けの季節になると読み、回復を願った。—さくららふぶきの下を、ふららと歩けば、一瞬、名僧のごとくにわかるのです、死こそ常態、生はいとしき蜃気楼と—先日『北の桜守』を見て所々に演劇的場面があり幕が閉まるところでは桜吹雪の中であちらの世界とこちらの世界が交差しているようだった。もしや滝田監督も茨木のり子ファンなのではと想像したりした。



編集スタッフから
50字劇評は大原克之先生を中心に4人でスタートして足掛け7年。様々な会員がいる旭川市民劇場で、先生の言葉を借りれば「芝居を観るというたったひとつの合意点」を大事にしようと思いを続けてきたように思います。菅野浩さん(前出「ことばの力」)も大原先生も、ベテラン会員にはおなじみの方たちでした。旭川市民劇場の礎を築かれたお二人に、心から敬意を表すとともに、「ご冥福をお祈りいたします」。